

調査研究

会派（ 研 修 ） 結果報告書

令和5年3月10日

会 派 名 真政倶楽部  
 代表者氏名 宮川 誠子

場 所	高松琴平電気鉄道株式会社 香川県高松市栗林町2丁目19番20号 神山町役場 徳島県名西郡神山町神領字本野間100
期 間	令和4年10月6日 ～ 令和4年10月7日
経 費	44,464円
参加者氏名	宮川 誠子
目 的	<p>1, 高松琴平電気鉄道株式会社              公共交通利用促進条例制定と政策前進の関係、公共交通が支える持続可能なまちづくりについて、地域密着の起業の取組を学び、本市の公共交通政策に役立てる。</p> <p>2, 神山町役場              ①来春開校「まるごと高専」で目指す地域づくり              ②光ケーブル敷設でIT企業を誘致「サテライトオフィス」の取組              ③新しい公共交通のかたち「地域のくるま」について</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>神山町役場</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>会議の様子 (神山町役場内)</p> </div> </div>
	<p>1, 高松琴平電気鉄道株式会社</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「コンパクト・プラス・ネットワーク」</li> </ul> <p>鉄道を基軸としたバス路線の再編により、持続可能な公共交通ネットワークを再構築し、集約されたまちを公共交通で繋ぐ。</p> <p>高松モデルとして既存ストックとICカードを活用し、ハード・ソフト両面からの施策により一定のサービス水準を維持しながら、持続性の高</p>

内容  
(視察先の  
現状、東広  
島市との比  
較、要請・  
陳情等)

い公共交通に変えつつ、需要に合わせた供給の最適化を行う。

・ことடன்新駅整備事業について

新駅「伏石駅」(※R3.11グランドオープン)は主要都市と連絡する高速バスのアクセスにより、広域都市間輸送交通の結節拠点となる駅。

また、国道を生かし高松市の東西を広域に結ぶバスや、市の中心部と居住エリアを結ぶ循環系バスの結節拠点としての機能を担う。



・公共交通利用促進施策「高齢者に対する公共交通利用支援」

新IruCaカード「ゴールドIruCa」を活用し、市内に在住する70歳以上の方を対象とし、IruCaが導入されている電車、路線バス、コミュニティバス等の運賃を半額にする事業を展開している

【販売枚数】28,480枚(R4.3末現在)

⇒70歳以上人口94,827人(R4.4.1現在)保有率約30%

・公共交通利用促進施策「電車・バスの乗継割引拡大」

[H26.3.1から制度開始]

ICカード「IruCa」による電車⇔バス利用時における乗り継ぎ割引額(20円)⇒100円に拡大、電車とバスの効率的なネットワーク形成し公共交通の利用を促進

初期費用(システム改修費等)+運賃割引額の差額⇒市が補助金として補填



内容  
(視察先の  
現状、東広  
島市との比  
較、要請・  
陳情等)

2. 神山町役場

①神山まるごと高専

開港予定日:2023年4月1日

学科名:デザイン・エンジニアリング学科

内 容  
(視察先の  
現状、東広  
島市との比  
較、要請・  
陳情等)

学生数：40人×5学年＝200人  
教員数：21人（非常講師除く）、  
就学スタイル：全寮制



建設中の高専

高専で学ぶことは、テクノロジー（ソフトウェアや Ai に関するテクノロジー教育）やデザイン（UI・UX やアートに関するデザイン教育）や起業家精神（リーダーシップ等の起業家精神）で、建学の精神として「まるとして学ぶ学校とし、

- ・人間の豊かな未来を創造するための必要な力
- ・授業のみならず、課外活動や寮生活などの機会
- ・成功も失敗も糧とし、すべての経験から「まるとして」学習することとしている。

#### ②サテライトオフィス

2010年10月にサテライトオフィス第1号として東京に本社があるITベンチャー企業がオフィスを開き、全国報道等もありサテライトオフィスという制度が全国に広まった。その後、ワークライフバランスやBCP対策として多くの企業が進出し、地域に雇用を生んだり、子どもたちが多様な大人、職場と会うことで選択肢の幅が広がった。また空き家の有効利用にも貢献している。



神山 STAY&WORK

#### ③新しい公共交通のかたち「地域のくるま」について

・背景として名西山分線は徳島のドル箱と言われてきたが、人口の減少、マイカーの普及などの社会情勢の変化によって乗客の減少が続いた、そうした中で昭和46年に徳島バスの北谷線と大中尾線が廃止され、その対策として町営による代替バスが運行されたのが町営バスの始まりである。しかし町営バスの利用人数は昭和47年度には6万人を超えていたものの令和3年度には3,733人となっており、令和2年度の収入と収支の差額はマイナス2千万円を超えている。現状としてバスの利用率(0.29人/便)と低く、毎年2千万円を超える赤字、さらに人口減少に比例して今後も利用者は減っていることを鑑み、町営バスを廃止

	<p>し、新しい公共交通手段を考え直す時期に来ている</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 神山町が実現したいこととして       <ol style="list-style-type: none"> <li>1、利用者の利便性向上（□困っている人の支援）</li> <li>2、公共交通手段の確保（□タクシー会社の経営成立）</li> <li>3、財政支出の維持と費用対効果の向上</li> <li>4、事務の効率化（⇒デジタル改革の推進）</li> </ol> </li> </ul> <p>① 運賃の 85%を町が補助、個人負担 15%（運賃 8 千円まで）        ② 対象者は神山町住民、年齢・用途制限なし        ③ 予約簡単なアプリ開発        を決定。新年度からスタート</p>
<p>効果・成果等</p>	<p>○香川県高松市 地域公共交通        高松市は、目指すべき都市構造を「多核連携型コンパクト・エコシティ」と定め、大小の複数拠点への都市機能の集積と市街地の拡散抑制によるコンパクトな都市構造と公共交通を基軸とした交通システムを目指して取り組みを進めている。そのため、これまで鉄道とバスが並行して運行しており、利用者が分散していた構造を見直し、都心部と周辺部、郊外部とそれぞれの役割を明確にして、鉄道とバスを乗り継ぐための交通拠点を、新駅を設置するなどして明確にし、効率的な公共交通ネットワークを再構築している。</p> <p>特に IC カードの IruCa の売れ行きは、様々な割引制度を設けることにより好調で、中でも 70 歳以上を対象として運賃が半額となるゴールド IruCa は高齢者の 3 割以上が保有する売れ行きとなっている。また、電車・バスの乗り継ぎも好調である。これらの取り組みにより、公共交通利用者は年々増加し、コロナ前の 2019 年には、2000 年の実績を上回る結果となっている。</p> <p>但し、高松市のこのような取り組みは、琴平電鉄という鉄道があり、またバスも競合がないなどの公共交通環境が整っていることにより可能となっているように見受けられる。基本的に本市とは環境が違っているため、システムをそのまま参考とすることはできないが、交通ネットワークの再構築という発想や公共交通はそもそも公共が責任を持って確保しなければならないものであり、必要な財源は措置されなければならないという市長の考え方は参考とすべきものと考ええる。</p> <p>○徳島県神山町 サテライトオフィス・まるごと高専・公共交通        神山町では、1999 年から国内外のアーティストを神山町に呼んで 2 か月余りをかけて作品を制作し、展示する取り組みが始められている。これは、地元に住んでいるおっちゃんの手作りの取り組みとして始まったものである。その後、2008 年に神山町が移住交流支援センターを設置するにあたり、町職員の人材不足か</p>

効果・成果等

ら、センターの民間委託を選択し、アートプロジェクトを取り組んできた大南氏が設立した NPO 法人グリーンバレーに委託した。民間に移住センターを委託したことにより、団塊の世代の移住希望者が多かった時代でも、公平性に捕らわれることなく、若い世代の移住者を多く受け入れることができた。

この取り組みがサテライトオフィスにつながり、2010 年にはサテライトオフィス第 1 号として、東京に本社のある名刺管理の IT ベンチャーがオフィスを開いた。これがメディアに取り上げられたこともあり、多くの企業が進出し、地域に雇用を生んだり、子供たちが多様な大人と出会うことで選択肢が広がったり、空き家対策にも貢献している。但し、これを可能にしたのは、2004 年に町が実施した光ファイバー網の整備である。テレビの地上デジタル化により、難視聴地域であった神山ではテレビが見られなくなる危機であったため、止む無く実施したのが光ファイバー網の整備であったが、これがあったため、サテライトオフィスができた。

そして、このサテライトオフィスが“まるごと高専”につながっていくのである。この“まるごと高専”は、サテライトオフィス第 1 号の名刺管理会社社長の発案であり、IT テクノロジーとデザインに加えて、日本の教育では誰も教えてくれなかった起業家精神を教える場を作りたいとの思いが実ったものである。この社長の思いが教育界を巻き込み、更に、ふるさと納税として個人 4 億円、企業 1 2 億円の寄付にもつながっている。社長は、このために 1 年間 300 回の企業に対するプレゼンを実施したとのことであり、その思いの強さには感服した。

また、神山町では、新しい公共交通の形にもチャレンジしている。2100 万円もの赤字を毎年出している町営バスを廃止し、地元のタクシー会社に公共交通を任せることでタクシー会社の経営を成立させながら、利用の少ないバス路線の維持という無駄な支出を止め、利用者の利便性を向上させるためにお金を使う道を選んだ。それが、運賃の 85% を町が補助する制度であり、個人負担を 15% としたのは、バス料金に近いものにするためである。これの画期的な点は、対象を町民全員としたことであり、利用用途にも制限をかけない点である。新年度からの実施であるが、その結果にも注目したい。

これら神山町が目覚ましい取り組みから見えてきたことは、【アイデアは既にあるものの新しい組み合わせである】という視察時に教えられた言葉に表されていることである。神山町の成功は大南氏のアートプロジェクトがスタートである。その大南氏が移住センターを任され、名刺管理会社の社長とつながり、サテライトオフィスやまるごと高専につながるのであって、何か奇抜なアイデアがあって、計画を実行するから成功するのではないということだろうと思う。今ここに既にあるものをどう組み合わせるか、それが成功か失敗かのカギを握っているのである。実行する

意欲と力のある人が存在していて、その人に移住センターを託したことにこそ、これらの奇跡的な成功の出発点がある。移住センターを町職員が運営していたらこれらのことは何も起こらなかったはずである。そして、【人は「可能性が感じられる」ところに集まる】という言葉も大切である。少々コストがかかっても【良いもの】を追求しなければ人は集まらない。コストばかりを気にして、安いものを追求する行政姿勢こそが、効果の上がらない施策ばかりを実施するという壮大な無駄遣いの原因であると教えらる。